未来に つなぐ

新美術館で よみがえる 世界の至宝

長野県立美術館完成記念
東京藝術大学
スーパークローン文化財展

2021 4.10㊏→6.6㊐

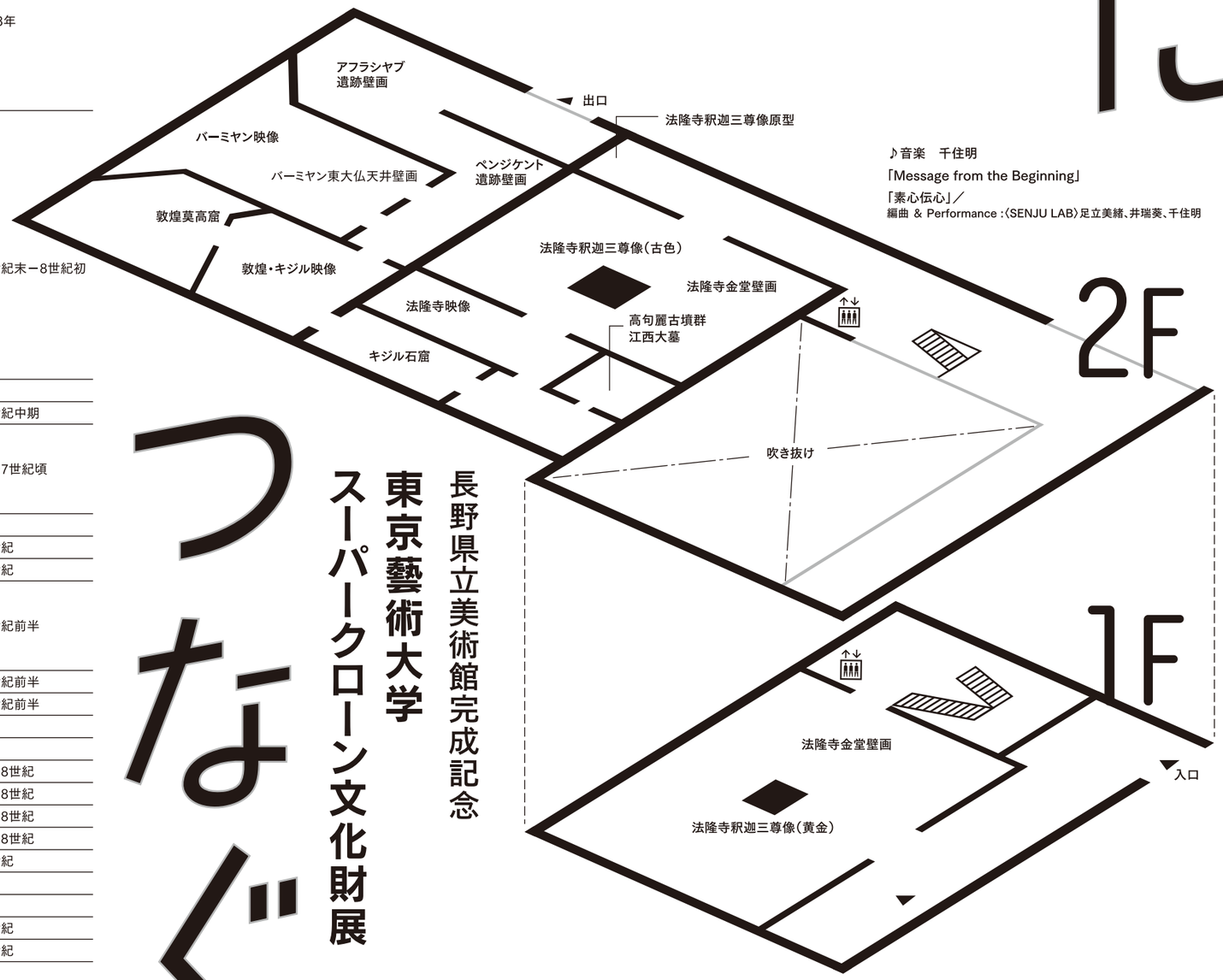
開館時間＝9:00－17:00（入館は16:30まで）
毎週水曜日休館（但し、5月5日は開館、5月6日［木］は休館）

お客様へお願い 当館は新型コロナウイルス感染防止対策を講じた上で、開館しております。感染防止の取組にご理解、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

○館内ではマスクの着用をお願いします。
○入館時の手指の消毒やこまめな手洗いの徹底をお願いします。
○館内の混雑を防止するため、混雑状況に応じて、入場を制限する場合があります。
○厚生労働省が配信する新型コロナウイルス接触確認アプリ「COCOA」の利用を推奨しています。
　本アプリ利用のご協力をお願いします。
○入館前に非接触体温計で検温させていただきます。37．5℃以上の発熱がある方は入館をお断りします。
　詳細はHPをご覧ください⇒https://www.npsam.com/article/single/topics/info-covid-19

主催＝長野県、長野県立美術館、信濃毎日新聞社、（公財）信毎文化事業財団
共催＝長野県教育委員会、東京藝術大学、信越放送　特別協力＝東京藝術大学COI拠点、株式会社IKI
後援＝長野市、長野市教育委員会、長野商工会議所、善光寺、長野県芸術文化協会、
（公財）八十二文化財団、（公財）ながの観光コンベンションビューロー、JR東日本長野支社

■お問い合わせ先
長野県立美術館（旧信濃美術館）　電話026-232-0052（9:00－17:00／水曜日休館）
信濃毎日新聞社事業部　電話026-236-3399（平日10:00－17:00）



♪音楽　千住明
「Message from the Beginning」
「素心伝心」／
編曲 & Performance :〈SENJU LAB〉足立美緒、井瑞菱、千住明

作品リスト

No.		種別	作品名		サイズ	原本年代
1	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺釈迦三尊像	中尊	287×202×96/cm	623年
				大光背		
				右脇侍及び右脇侍光背		
				左脇侍及び左脇侍光背		
				上座		
2	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第1号壁	320×270/cm	7世紀末－8世紀初
3	日本一法隆寺			第6号壁	320×270/cm	7世紀末－8世紀初
4	日本一法隆寺			第7号壁	320×166/cm	7世紀末－8世紀初
5	日本一法隆寺			第8号壁	320×166/cm	7世紀末－8世紀初
6	日本一法隆寺			第9号壁	320×270/cm	7世紀末－8世紀初
7	日本一法隆寺			第10号壁	320×270/cm	7世紀末－8世紀初
8	日本一法隆寺			第11号壁	320×166/cm	7世紀末－8世紀初
9	日本一法隆寺			第12号壁	320×166/cm	7世紀末－8世紀初
10	日本一法隆寺	模型	法隆寺釈迦三尊像	鋳造のための3D出力原型	280×200×94/cm	
11	スーパークローン文化財とは	映像	スーパークローン文化財		3分51秒	
12	日本一法隆寺	映像	法隆寺釈迦三尊像（黄金）	スーパークローン制作工程	8分14秒	
13	日本一法隆寺	クローン文化財	法隆寺釈迦三尊像	中尊	418.0×275.2×246.3/cm	623年
				大光背		
				右脇侍及び右脇侍光背		
				左脇侍及び左脇侍光背		
				上座		
				下座		
			法隆寺金堂中の間 天蓋			
14	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第1号壁	320×270/cm	7世紀末－8世紀初
15	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第2号壁	320×166/cm	
16	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第3号壁	320×166/cm	
17	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第4号壁	320×166/cm	
18	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第5号壁	320×166/cm	
19	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第6号壁	320×270/cm	
20	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第7号壁	320×166/cm	
21	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第8号壁	320×166/cm	
22	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第9号壁	320×270/cm	
23	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第10号壁	320×270/cm	
24	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第11号壁	320×166/cm	
25	日本一法隆寺	スーパークローン文化財	法隆寺金堂壁画	第12号壁	320×166/cm	
26	日本一法隆寺	映像	法隆寺釈迦三尊像（古色）	クローン制作工程	7分3秒	
27	日本一東京藝術大学	クローン文化財	天王立像		全高51.7/cm	7世紀中期
28	北朝鮮一高句麗江西大墓	クローン文化財	高句麗古墳群 江西大墓《四神図》	南壁「朱雀」再現	227×316×304/cm	6－7世紀頃
				北壁「玄武」再現		
				西壁「白虎」再現		
				東壁「青龍」再現		
29	中国一キジル石窟航海者窟	映像	キジル石窟		4分50秒	
30	中国一キジル石窟航海者窟	クローン文化財	キジル石窟第212窟	《シュローナコーティカルナ》	124.2×633.0/cm	6世紀
		スーパークローン文化財		《マイトラカニヤカ》	133.7×574.0/cm	6世紀
31	中国一敦煌莫高窟第57窟	クローン文化財	敦煌莫高窟 第57窟	南壁	331×398×637/cm	7世紀前半
				北壁		
				西壁		
				東壁		
		スーパークローン文化財	敦煌莫高窟 第57窟	如来坐像	約180×80×60/cm	7世紀前半
				菩薩立像	約180×40×30/cm	7世紀前半
32	中国一敦煌莫高窟第57窟	映像	敦煌莫高窟 第57窟	制作工程（タイムラプス）	56秒（タイムラプス）	
33	中国一敦煌莫高窟第57窟	映像	敦煌莫高窟		5分40秒	
34	アフガニスタン	クローン文化財	アフガニスタン流出文化財 バーミヤン石窟	壁画 仏坐像	16.4×13.2/cm	7－8世紀
35	アフガニスタン	クローン文化財		K洞ヴォールト部分 壁画 仏坐像	34.0×30.0/cm	7－8世紀
36	アフガニスタン	スーパークローン文化財		K洞ヴォールト部分 壁画 仏坐像想定復元	34.0×30.0/cm	7－8世紀
37	アフガニスタン	クローン文化財		K洞 壁画 仏坐像	24.5×28.8/cm	7－8世紀
38	アフガニスタン	スーパークローン文化財	バーミヤン東大仏天井壁画	《天翔る太陽神》	300×750×850/cm	6世紀
39	アフガニスタン	模型	バーミヤン東大仏天井壁画	《天翔る太陽神》	約91×60×22/cm	
40	アフガニスタン	映像	バーミヤン15年目の春		3分00秒	
41	タジキスタン	クローン文化財	ペンジケント遺跡発掘区VI 広間1壁画《ハープを奏でる女性像ほか》		142.6×245.6/cm	8世紀
42	ウズベキスタン	クローン文化財	アフラシヤブ遺跡壁画		73×698.7/cm	7世紀
43	ウズベキスタン	模型	アフラシヤブ遺跡壁画		25.5×90.5×90.5/cm	

スーパークローン文化財について

長野県立美術館　学芸課長　田中　正史

美術や芸術の分野で「複製」と聞くと、多くの人はヴァルター・ベンヤミンが1936年に発表した論考『複製技術時代の芸術』を思い浮かべるのではないだろうか。

そこでは、芸術作品が、「それが存在する場所に、一回限り存在する」という特性を喪失し、「根源から伝えられうるものの総体」である「真正性」すなわち「アウラ」が損なわれる経過が語られるとともに、複製を前提に19世紀末から台頭してきた、写真や映画やダダイズム絵画などを積極的に評価するための理路が提示されている。

一方、「複製」という言葉には、美術作品の代替品としての「レプリカ」や、さらには「贋物」にまで至るマイナスのイメージがつきまとうことも確かであろう。

東京藝術大学は、最新のデジタル技術に人間の手技や感性を取り入れ、社会情勢や自然環境の変化により、間近で実物を鑑賞することが困難になった文化財を、「クローン文化財」あるいは「スーパークローン文化財」として複製し、周囲の環境までも含めて精密に復元する技術を確立した。

「クローン文化財」とは対象となる文化財を複製し、現状のあるがままの姿に「再現」したもの。対して「スーパークローン文化財」は、その文化財が制作された当時の状況を研究し、当時の姿のままに「復元」した複製である。

いずれも、「複製」する行為を、素材・質感・技法と文化的背景や精神性など継承する手段として用い、新たな芸術を生み出すことを目指しているという。

もともと、文化財は常に、危険にさらされている状況にある。科学の発展は、文化財を保護し、修復する技術を進化させてきたが、一方で、地球温暖化を引き起こし、近年の気候の急激な変化が、文化財をさらなる危険に直面させることになった。国際情勢の緊迫による地域紛争の激化も、その危機を加速させている。

実は、物理的な環境だけを前提に考えると、文化財を確実に保護するためには公開などせず、外部から遮断された環境に秘匿しておくことが最善の方法なのである。しかし、実際の歴史的な経緯を踏まえるならば、文化財の存在が幅広く認識され、多くの目に触れることができたからこそ、それに心を強く動かされた人たちの間に、文化財を守り伝えたいという思いが高まり、文化財がのこされる結果につながったという側面もある。美術館や博物館における活動も含めて、文化財の保存と公開の問題は、背反すると同時に表裏一体でもある、矛盾に充ちた、きわめて複雑な営みなのだといえるだろう。

そのような文化財の保存と公開の問題において、2017（平成29）年、東京藝術大学大学美術館で開催されたシルクロード特別企画展「素心伝心 クローン文化財 失われた刻の再生」展で紹介された「クローン文化財」は、新たな方向性を指し示すことになった。

近年はLED照明が導入されて改善されたようだが、長年、法隆寺金堂の暗い空間に安置され、はっきりと目視することが困難な状態にあった釈迦三尊像や、1949（昭和24）年1月26日の早朝に発生した火災で焼損した金堂外陣の壁画、保存上の理由から拝観が制限されている中国・敦煌莫高窟の壁画、ドイツの探検隊に剥ぎ取られて、持ち去られた上に空襲で焼失してしまった中国・キジル石窟の壁画、さらに、2001年に当時のターリバーン政権により爆破されたアフガニスタンのバーミヤン東大仏天井壁画など、もう、この世の中に存在しないか、存在はしていても、多くの人たちの目につくことはない文化財を、間近で観察することができるのである。

もちろん、それは本物の文化財ではなく、あくまでも「複製」である。しかし、法隆寺金堂の釈迦三尊像の複製を、近い距離で、細部に至るまで精密に観察するとことができるならば、実際に本物の釈迦三尊像を鑑賞する際にも有効な経験となるだろう。

キジル石窟の航海者窟壁画や、バーミヤン東大仏天井壁画など、既に失われてしまった文化財であっても、調査に基づいて正確に再現された「複製」を観察することで、鮮明なイメージを確固としたものにできていれば、世界の歴史の中で、文化財がどのような影響関係により展開されてきたかを比較検討しながら研究するための大きな助けになるはずである。

さらに特筆すべきは、今回の長野県立美術館における展示が本邦初公開となる、全身が金色に輝く、「復元」された「法隆寺金堂釈迦三尊像」の存在である。

そもそも、仏像の造形は、古くから経典に説かれた、『儀軌』と称される規則に拠って為されてきた。中でも、最高位たる如来像は全身が金色に輝くとされており、法隆寺金堂釈迦三尊像も建立された当初は光背も含めた全体に金メッキが施されていた。今回、展示されるのは、その状態での釈迦三尊像の「複製」であり、いまとは相当に印象が異なる、1400年近くもむかしの姿を、現在の姿と比較しながら視覚的に体験することができるのである。

対象そのものが失われてしまった、キジル石窟の航海者窟壁画やバーミヤン東大仏天井壁画も同様であるが、現存している法隆寺釈迦三尊像についても、現在の状態からは伺い知ることができない造立当時の姿形を、VRやARといった仮想現実の世界のこととしてではなく、実体を持った立体造形の「復元」として体験できるならば、当時の製造技術の実態を知るためなどに、きわめて有用であるといえるだろう。

また、仏像や壁画の本体だけでなく、それが置かれている環境までをも含めて立体的に「復元」することは、美術館や博物館での「本物」の展示――それは、文化財が本来ある場所から切り離された、いわゆるホワイトキューブでの展示――とは大きくちがった意味合いを包含することになった。とくに、今回の展示のような仏教美術に焦点を当てた場合には、その周囲の信仰の場としての環境が復元されるのである。

前述した、ベンヤミンの『複製技術時代の芸術』によるならば、世界最古の芸術作品は魔術的・宗教的な儀式に用いるために成立していたのであり、唯一無二の存在であるからこその一回性に「礼拝的価値」を有していたという。

時代が経過すると、この礼拝的価値に対して、新しい時代の芸術作品は、もう一方の極である「展示的価値」へ移行してゆくのだが、それには複製技術の手法が大きく関わっていたとされる。そのような前提に立つときに、「スーパークローン文化財」の新しい複製技術が、信仰の対象としての芸術作品（文化財）の在り方を見る者に強く思い起こさせるということは、逆説的ではあるが、興味深い事象なのではないだろうか。

もう一つ、「スーパークローン文化財」の技術から連想されることに、フランスの作家であり、文化担当国務大臣も務めた、アンドレ・マルローが提唱した「空想美術館」の概念がある。「空想美術館」とは、同じく複製の技術である印刷や写真などの発達により、世界中の歴史的な芸術作品を図版で鑑賞できるようになったことで、あらゆる芸術作品の図版を並べて比較できるようにし、芸術作品の着想や制作の過程における相互関係の視覚化を通して新たな解釈を促すものとされる。「スーパークローン文化財」の技術は、このような試みを立体化して実行できる可能性も秘めているのではないかと考えられる。

今回の長野県立美術館のように新しく建築された施設では、コンクリートが完全に乾くまで、コンクリートの打設から二回の夏の季節を越すことが必要とされ、それまでの期間中は作品保全の観点から貴重なオリジナルの文化財を展示することができない。長野県立美術館の場合、今年の夏までがこの期間に当たる。

そのような状況で、あえて実物ではない「複製」の文化財を展示することにより、美術館という施設の本質に関わる、公開と保存・修復・復元をめぐるさまざまな問題について新たな視点から考える機会になるのではないかと期待される。